

## 2.1.3 学生の受け入れ .....

### 【評価項目 5-0-1】 入学者受け入れ方針等

(必須要素) 入学者受け入れ方針と大学・学部等の理念・目的・教育目標との関係

(必須要素) 入学者受け入れ方針と入学者選抜方法、カリキュラムとの関係

(選択要素) 学部・学科等のカリキュラムと入試科目との関係

### 【評価項目 5-0-2】 学生募集方法、入学者選抜方法

(必須要素) 大学・学部等の学生募集の方法、入学者選抜方法、殊に複数の入学者選抜方法を採用している場合には、その各々の選抜方法の位置づけ等の適切性

### 【評価項目 5-0-3】 入学者選抜の仕組み

(必須要素) 入学者選抜試験実施体制の適切性

(必須要素) 入学者選抜基準の透明性

(選択要素) 入学者選抜とその結果の公正性・妥当性を確保するシステムの導入状況

### 【評価項目 5-0-5】 アドミッションズ・オフィス入試

(選択要素) アドミッションズ・オフィス入試実施の実効性

### 【評価項目 5-0-7】 入学者選抜における高・大の連携

(選択要素) 推薦入学における、高等学校との関係の適切性

(選択要素) 入学者選抜における、高等学校の「調査表」の位置づけ

(選択要素) 高校生に対して行う進路相談・指導、その他これに関わる情報伝達の適切性

### 【評価項目 5-0-8】 社会人学生の受け入れ

### 【評価項目 5-0-9】 科目等履修生、聴講生等

(選択要素) 科目等履修生、聴講生等の受け入れ方針・要件の適切性と明確性

### 【評価項目 5-0-10】 外国人留学生の受け入れ

(選択要素) 留学生の本国地での大学教育、大学前教育の内容・質の認定の上に立った学生受け入れ・単位認定の適切性

#### <2003年度に設定した目標>

1. 学科再編に伴う入試制度変更の受験生への周知
2. 各種入試における入学生数の拡大

#### (現状の説明)

文学部は2003年に改組し、文化歴史学科・総合心理科学科・文学言語学科の3学科となった。さらに、2005年度入試から指定校推薦枠を拡大したため、以下の説明は2005年度入試のデータに基づく。(大学基礎データ表15参照)

文学部では、マスタリー・フォア・サービスの精神を理解し、かつ文学部生としてふさわしい人材を得るために、各種入試として指定校推薦入学・協定校推薦入学・帰国生徒入試・特別選抜入試(スポーツ分野)・社会人入試・編入学試験を行っている。

センター入試を含む一般入試の募集定員は、文化歴史学科165名、総合心理科学科105名、文学言語学科195名の合計465名である。

選抜形態として、文化歴史学科は思想系(哲学倫理学専修・美学芸術学専修・地理学地域文化学専修)と歴史系(日本史学専修、アジア史学専修、西洋史学専修)の2つの系を第1志望・第2志望で選択させ、総合心理科学科(臨床教育学専修、教育心理学専修、心理学専修)では学科全体で選抜し、文学言語学科(日本文学日本語学専修、英米文学英語学専修、フランス文学フランス語学専修、ドイツ文学ドイツ語学専修)では4専修を第1志望から第4志望で選択させている。

入学後、3学科における専修配属の方法・時期が異なる。文学言語学科では入学時の専修で進級し、文化歴史学科では2年進級時、総合心理科学科では3年進級時に専修配属を行う。なお、ゼミへの配属はいずれも3年進級時となっている。

アドミッションズ・オフィス入試は文学部では導入していない。また、2006年度入学試験においても導入しないことが決定している。

指定校推薦入学は2005年度に拡大した。その結果、文化歴史学科96名、総合心理科学科63名、文学言語学科116名、合計275名を募集定員としている（協定校を含む）。募集のあり方として、175校の高等学校から各2名の生徒の推薦を依頼している。さらに、学科・専修における偏りをなくするために、175校を5つのグループに分け、それぞれ2つの学科・専修を指定している。一人目の生徒については評定平均4.2以上を、二人目については特定の科目の評定値を設定し、特色ある生徒の推薦を依頼している。推薦された生徒には面接を実施し、選抜している。

協定校推薦入学では面接試験を行い、15名を受け入れている。

帰国生徒入試では若干名を受け入れている。選抜にあたっては、英語と小論文、面接を行い、総合的に可否を判定している。2005年度に入学したのは4名である。

スポーツ能力に優れた学生を受け入れるための特別選抜（スポーツ分野）では、15名を募集している。選抜にあたっては、スポーツ能力判定を軸に、文学部生としての能力や意欲を試みるために小論文試験と面接試験を行い、総合的に可否判定を行っている。

外国人留学生入試や編入学試験では、それぞれ若干名を募集しているが、2005年度で入学したのは合わせて8名である。選抜にあたっては、学力考査と面接を実施している。

科目等履修生や聴講生等は、教員免許等の取得を目指す者が多いこと、社会人が望む学科・科目が多いことから文学部では比較的多くの人を受け入れている。聴講を許可する科目については各専修に問い合わせ、聴講生に応募された方を面談の上で受講を許可している。

#### （点検・評価の結果）

センター入試を含む一般入試の募集比率は、文学部募集定員770名の60.4%にあたる。大学が最終目標とする一般入試の募集定員の比率（50%）の過渡的な比率（60%）をクリアしている。

文学部の理念・目標からすれば、選抜形態としてふさわしいのは、学部全体ないしは学科別に入学し、幅広い教養を身につけたうえで、専門領域の学習に入ることである。しかし、現実に選抜形態が学科によって異なり、実質的に専修別での入学となっているのは、以下の理由による。フランス文学フランス語学専修やドイツ文学ドイツ語学専修におけるフランス語やドイツ語の教育は、ほとんどが初習言語であるため、早期に開始する必要があること、英米文学英語学専修における英語教育も長期にわたるほうが望ましいこと、また、文化歴史学科においては専修が6つ、文学言語学科においては4つに分かれており、学科全体で入学させた場合、3年進学専修分属において特定の専修に学生が集中することが予測されることによる。これらのことは、各研究領域における教育効果、教育の機会均等、学生の意識の保持などを考えてのことであるが、専修間での学生数の多寡が生じているなど検討すべき課題を残している。

アドミッションズ・オフィス入試は全学的な趨勢から言えば実施を目指すべきであるが、一般入試における文学部専任教員の役割の重要性・重大性を考慮すると、新しい入試の導入によって専任教員の負担が現状以上に増えることが危惧された。これらの危惧を減少させながらの導入についてさらに検討を重ねていく。

指定校推薦入学者は、2005年度247名であった。175校から2名ずつの計350名からすれば70%の充足率で、募集定員（260名）からすると95%となる。比較的安定して確実に入学生を集めていると評価できる。

指定校推薦入学の制度的な問題点をあげるとすれば、以下の4点である。①指定校が西日本、特に阪神間に多いこと。これまでも九州、四国、中国、中部、関東地方の高等学校を指定したが、推薦辞退が続出している。入学者数の確保からすれば、いきおいこうした傾向になる。②1校2名の枠のあり方。現状では、二人の評定値を変えるなどして、特色ある生徒を推薦してもらおうとしている。すべての高等学校に2名の枠が必要であるのかという疑問がある。換言すれば、1名の学校と2名（ないしはそれ以上）の学校が並存しても良いのではないだろうか。③評定平均値のあり方。上述のように一人目の要件として4.2という数値をあげているが、高等学校における格差を考慮していない。高等学校の序列化という悪影響もあるが、一律の設定のあり方には改善の余地がある。④指定校を5グループに分けて学科・専修を指定していること。グループ指定によって受験生が指定されていない学科・専修への進学希望の芽を摘むことになっている。

特別選抜入試（スポーツ分野）の問題点として、文武両道を求めるシステムであるが、能力的に超一流ではない、あるいは勉強についていけないといった両極の意見が出るところでもある。大学スポーツのあり方についての考え方を根幹から検討することが必要であろう。

#### （改善の具体的方策）

一般入試において、学科間で募集形態に相違があることについて、わかりやすい入学形態を目指すのか、あるいは現状を維持するのかについては、改組の完成年度を待ち、2007年度入試におけるあり方を検討する必要がある。これは入学後のカリキュラムにもかわることであるので、文学部全体の立場からの議論が必要である。

アドミッションズ・オフィス入試についても、継続的に検討していく必要がある。

入学から卒業にいたる追跡調査を行い、どの入試形態で入学した学生が関西学院にとって、また文学部にとって望ましい者が多いか、といった点について見極めも必要かと思われる。

問題点については、改組の完成年度を待たないと入試のあり方を変更することは難しいが、現時点から問題点と改善策を協議し、2007年度入試からのリニューアルを検討したい。